

無アクセントの比較研究

— 栃木・茨城アクセントと宮崎アクセントの比較 —

早野 慎吾

(宮崎大学教育文化学部)

キーワード：句音調 句階層構造 句関係明示構造

1. はじめに

無アクセントとは、弁別的なアクセント型がなく、語(もしくは文節)における確定的な音調変化をもたないことを意味している。無アクセントは一型アクセント、無型アクセントなどとも呼ばれるが、これはアクセントをどのように捉えるかの違いによると考えられる。筆者は日本語アクセントを音調的統合機能を有する現象と定義しており(早野 1992b)、無アクセントという現象に関しては、弁別の特徴は存在しないが、アクセントの特徴(音調的統合機能)は存在すると考えている。そのため非弁別的アクセントと表現することが適切であると考えが、ここではより一般的な無アクセントと表現することにする。

無アクセントに関しては、「アクセントの高低は無意味なものである」(柴田 1961 p.14)、「きわめて自由に(無法則的に)発音される」(平山 1968 p.34)という記述が一般的なものであろう。これらは、アクセント現象を弁別の特徴だけに限定した場合の記述と考えられる。アクセントの本質を統合機能とし、その統合機能という観点から無アクセントを分析すると、無アクセントの本質に迫れるのではないかと考えている。

無アクセント域は北関東を含む奥羽地方南部、八丈島、静岡県井川地方、福井市及びその付近、愛媛県の一部、九州中部、五島列島などに散在しているが、面積的には奥羽地方南部と九州中部でそのほとんどを占めている。本稿では奥羽地方南部と九州中部の無アクセントを比較分析し、その特徴的な違いを明確にすることを目的とする。奥羽地方南部方言に関しては栃木・茨城両県の調査結果、九州中部方言に関しては宮崎県の調査結果を主に使用する。

2. アクセントの機能

アクセントの機能として弁別機能と統合機能が指摘される場合が多い。たとえば『日本語百科大事典』(1988)では「アクセントには意義を弁別する機能と、語のまとまりを示す統合機能とがあり」(秋永一枝執筆)とある。この二つの機能は有坂(1941)が提示したものである(註1)。統合機能に関しては大きく分けて二つの解釈がある。金田一(1956)では統合機能を切れ目を示す機能とし、京阪式の全平型といわれる $\overline{\text{タケ}}$ (竹)・ $\overline{\text{タケガ}}$ (竹が)などを「統合機能ゼロの例」としている。これに対して柴田(1955、1957)では音節をアクセント節にまとめる機能としている。金田一の説には問題がある。急激な上昇や下降が許されない全平型というスタイルが存在するということは、そこにスタイルをつくる力(統合力)が存在していなければならない。そのようなスタイルにまとめる力を統合機能と筆者は考える。

このように解釈すると、アクセント型とは統合機能によって統合された結果であるといえる。そして、東京方言における／カキ／(柿)と／カ^ハキ／(牡蠣)、／アメ／(飴)と／ア^ハメ／(雨)などを区別する弁別機能に関しては、語のまとめ方の有標的な違いであり、アクセント核は統合の核(中心)であると考えられる。このように考えると「弁別機能」「アクセント型」「アクセント核」などの概念を統合機能との関連でひとつにまとめることができる。

柴田(1955、1957)は統合機能を音節連続の統合に限定しているが、音調は語連続を統合している場合もある。それが川上(1995 他)の提示した句音調である(註2)。つまり、音調的な統合機能には音節連続を語に統合するレベルと、語連続を句に統合するレベルが存在すると考えられる(註3)。既に述べたとおり筆者は音調的統合機能を有する現象を日本語アクセントとする立場をとるので、句レベルの統合機能(句音調)もアクセントとして扱う。筆者の定義では、句音調ではなく句アクセントと表現することが適切と思われるが、先行研究に従って句音調と表現することにする。語連続を統合する句音調に対して、音節連続を統合する現象を語アクセントと表現する。語アクセントと句音調は質的にも異なるが(註4)、ここでは統合レベル(単位)を基本的な違いとして扱う。川上(1963)は東京語の[ウ^ハマ^イ]をアクセント／ウマ^ハイ^イ／と句音調(句頭イントネーション)／○^ハ○^イ…／の複合表記と説明するが、筆者はレベル分けしていないアクセント表記と捉える。

3. 北関東の無アクセント

川上の提示した句音調という概念は準アクセントとか、派生節といわれていた東京語の上昇現象を適切に説明しただけでなく、音調現象における統合機能にレベルの違いがあることを明確にした点においても優れている。句音調は東京語以外の地域言語にも適用できる概念で(上野 1989)、特に無アクセントの説明に有効であると思われる。筆者は、北関東の無アクセントに関する研究報告を既にいくつか行っており(早野 1992a、1999 他)、ここではその概略を述べる。

奥羽地方南部の高年層に対して読み上げ調査を行うと、弁別的スタイルとは異なる一定のピッチパターンが観察できる。服部(1954)では次の記述がある。

たとえば、仙台方言では

「ハナ」(花、鼻以下同様)

「ハナダ」

「コノハナダ」

「コノハナガソーダ」

のようであって、「ハナ」(花、鼻)という単語に該当する部分の音調を見ると、全く一定してないようで、発話の全体の調子が非常に平板的である。(p.267)

この現象は北関東の栃木県芳賀郡(早野 1990)、茨城県玉造町(早野 1992a)でも観察できる。このピッチパターンは発話文全体の拍数で決定されている。つまり発話文が全体で二拍であれば、その構成が二拍名詞単独であれ、一拍名詞+ガ(助詞)であれ[^ハ○^イ]となる。発話文全体が三拍以上であれば[○^ハ○^イ…○^イ]と発音される(註5)。この結果だけから判断すると、上昇は文の始まりを、下降は文の終わりを表すと解釈できそうである。しかし、

上昇や下降が文を単位とするものでないことは、自然談話の分析からわかる。読み上げ式調査の結果と同じように、文頭で上昇し、文末で下降するパターンも多いが、そうでないパターンも多い。以下の記録は、茨城県玉造町での談話資料によるものである(早野 1992a)。

(1) 文頭で上昇し、文末で下降するパターン。

[コ「ドモノコロノミズアソビッテノガスキナ」ンデスヨ]

(子供の頃の水遊びっていうのが好きなんですよ)

[ヨ「ネゲーコワクナ」ッチッタ] (余計怖くなってしまった)

(2) 複数の上昇があり、文末で下降するパターン。

[ク「ライガラクライマデ ハ「ドライブ」ルガラ] (暗くから暗くまで働いているから)

[フ「ネデカエッテキデ ハ「シゲダ」ノッタ」ラネ] (船で帰ってきて橋桁乗ったらね)

(3) 文頭で上昇があり、複数の下降があるパターン。

[「ユーランセンッテユーフネ」ガデタ」ンデスヨ] (遊覧船っていう船が出たんですよ)

[ハ「ナノアダマ」ガマッカニヤゲ」デナ] (鼻の頭が真っ赤に焼けてな)

(4) 複数の上昇と、複数の下降があるパターン。

[ア「ダシラノコ」ドモノコロノミズアソビッテユー」ノワ] (私らの子どもの頃の水遊びというのは)

[「マーリガドブドブデ ハ「イッデグ」ドデランニヤグナ」ッチャー]

(まわりがドフドフで入っていくと出られなくなってしまう)

(1)のパターンは、読み上げ式調査の結果と一致するものである。しかし、自然談話では、(2)から(4)までのように、ひとつの文で複数の上昇と下降が出現している例が多く、上昇と下降は句を単位としている句音調であることがわかる。この複数の上昇と下降が出現する現象は句の階層性(階層構造)を意味していると考えられる(早野 1999)。たとえば上の(2)から(4)までのパターンは次のような構造になる。アンダーラインの部分は強い統合を示す。

(2)のパターン [1ク「ライガラクライマデ」 [2ハ「ドライブ」ルガラ]2]1

(3)のパターン [1 [2「ユーランセンッテユーフネ」ガ]2 デタ」ンデスヨ]1

(4)のパターン [1 ア「ダシラノ」 [2 [3 コ「ドモノコロ」ノ]3 ミズアソビッテユー」ノワ]2]1

読み上げ調査の結果は句≤文のイコール関係が成り立った場合の現象と解釈できる。音調に関しては文末イントネーションと呼ばれる現象もあり、すべてが句という概念で説明できるわけではないが、その特徴的な現象の多くは句を単位とするものであると筆者は考

えている。

北関東における無アクセントの特徴は、連続する平板調にある。語(もしくは文節)を単位とする下降の規則が明確な東京方言と比べると、その平板調の長さが強調される。図1の発話は日本放送協会(1981)の茨城県新治郡葦穂村における談話記録をピッチ曲線(基本周波数曲線)を示したものであるが(註6)、平板調が連続していることが確認できる(文頭の部分は、やや他者と声が重なっている)。

この発話では、ピッチの自然下降が小さい。これは多くの自然談話から多くのサンプルを用いて分析する必要があるが、全体的に茨城方言の自然下降は東京方言に比べて小さいように思われる。このことが「尻上がり」といわれる現象と関係しているのではないかと思われる。

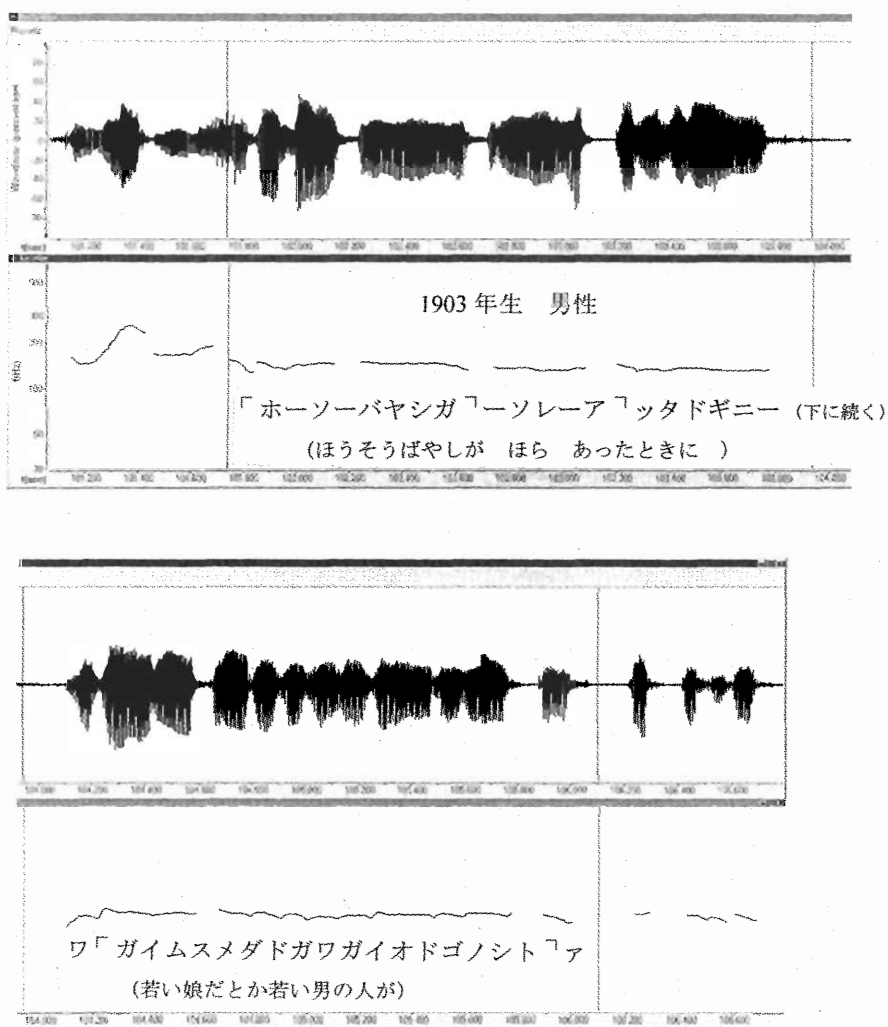


図1

4. 宮崎の無アクセント

4. 1. 従来の研究報告

宮崎県下には無アクセント域が広く分布していることは有名であるが、その無アクセントについて詳しく論じた研究は少ない。岩本(1991)には「宮崎式の平板一型——型知覚がなく、従って高低に固定性がないが、概して平板であるというようなものを——を、「無アクセント」と呼ぶことにする。」(p.248)、「県下の分布状況について述べると、無アクセントは、日向のほとんど全域に及び、東諸県も同様、また北諸県の中にも4(山之口)の如く、西諸県の中にも地点8(須木)の如く、無アクセントは広い範囲に分布する。」(p.249)のような記述がある。このような記述が宮崎無アクセントに関する一般的なものである。岩本(1983)では、上記のものよりもやや詳しく、次のような記述がなされている。

日向方言は、平板一型アクセントで、たとえば、宮崎市付近のは大体次のようである。

〇〇 〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇〇

右のように、二拍の場合だけけだしの第一拍が高いように感じる。一拍の語は助詞をつけると二拍の語とほぼ同じようになる。三拍以上は大体において初めと終りが低めで、中間がやや脹らみ気味になる。それは高くなると言ってよいかどうか甚だ微妙である。このようなあいまいな言い方しかできないところが言わば特徴であるかもしれない。品詞には関係ないし、語でも文節でも変わりはない。話者には型の意識などは全然ない。調査の際、話者はいろいろに言うが、くりかえしゆっくり丁寧に言うと、大体平板な中脹らみのようなことになる。つまり落ち着いた発音では目立った起伏のない平板一色の状態であるから、平板一型アクセントと言われるのであろうが、むしろ「無アクセント」という方が適切であると思う。(p.275)

これらの記述は、読み上げ式調査の結果を基にしていると思われる。これらの報告は、奥羽地方南部の無アクセントに関する報告とほぼ同じであり、奥羽地方南部の無アクセントと宮崎の無アクセントは、一見、同一のピッチパターンであると解釈できそうである。しかし、筆者の観察では、両者のピッチパターンは大きく異なっている。その具体的な相違点について、2004年5月から2006年2月にかけて、九州中部の無アクセント域に属する宮崎市(佐土原・生目)において行ったアクセント調査を基に論じる。

4. 2. 読み上げ式調査から

読み上げ式調査は、70代以上の高年層話者5名と20代の若年層話者5名に対して行った。若年層話者では、ほぼ完全な宮崎アクセントの話者と東京アクセントを獲得しつつある話者(註7)とに分かれたので、今回は高年層のデータだけを用いることとする。調査項目は栃木・茨城調査(早野 1991a)と同じものを用いて、二拍名詞全48語を「名詞単独」「名詞+ガ」「短文(名詞が主語となる文)」の形でインフォーマントに読み上げてもらった。全体的な傾向は以下のとおりである。

「名詞単独」の発音に関しては、北関東同様に[⁰〇⁰〇]のように二拍目手前で下降する傾向が強い。3名の話者は、ほぼすべての語を[⁰〇⁰〇]で発音したが、2名は[⁰〇⁰〇]の発音の途中、数回にわたって[〇〇][⁰〇〇]のような下降のない発音が数語続いた。

「名詞+ガ」の発音に関しては[¹○¹○¹▷]のように、発音する傾向が強く、5名の話者が、ほぼすべての語を[¹○¹○¹▷]で発音した。これらのピッチパターンは、岩本(1983、1991)の報告と大きく異なる。この発音は、尾高一型アクセント(平山 1974)を思わせる。

「短文」の発音に関しては、個人差が大きかった。個人によってどのパターンで発音するかは異なるが、調査した5名とも、短文を一定のパターンで発音することが多かった。SH氏(1925年生)とKS氏(1938年生)は下記の①のパターン、NY氏(1925年生)は②のパターン、NH氏(1927年生)は③のパターン、NF氏(1925年生)は④のパターンで発音していた。②のパターンは岩本(1983、1991)の報告とほぼ一致する。③などは、尾高一型アクセントの発音と一致する(平山 1974)。

[¹○¹○▷○¹○¹○]・・・①

[○○▷○○¹○]・・・② ※2拍目手前にわずかな上昇が出現する場合あり。

[○○¹▷¹○○¹○]・・・③

[¹○¹○▷○○]・・・④

4.3. 談話資料から

ここでは2005年3月に宮崎市佐土原町(採録当時は宮崎郡佐土原町)で採録した談話資料と、2006年2月に宮崎市生目で採録した談話資料を用いる。佐土原資料は高年層4名(男性1名、女性3名)のネイティブスピーカーによる談話資料である。生目資料は、高年層2名と若年層3名の談話資料である(若年層の1名だけ島根出身で、他はネイティブスピーカー)。また、国富町(宮崎市に隣接)出身の話者MY氏(1979年生 女性)^(註8)の発話と内省も使用する。

無アクセントのような弁別性を持たないピッチパターンを分析する場合、不自然になりがちな読み上げ式調査だけでなく、談話資料による多数のサンプルを使用する必要がある。

宮崎無アクセントのもっとも特徴的と思われるのは句頭の上昇が出現せず(もしくは非常に小さく)句末で卓立(上昇・下降)するピッチパターン(句末卓立型)で、読み上げ式調査における③のパターンに近いものである^(註9)。このピッチパターンは北関東と大きく異なる現象である。たとえば次のようになる。

⑤[コン¹ナ¹セカイ¹ガ¹ソーソーシクナッタ¹ラ¹タイヘンジャド¹テ¹ワタシワオ¹モー]

(こんな世界が騒々しくなったら大変じゃどって私は思う) 宮崎市 1929年生 女性

⑥[リヨ¹ーワ¹シタヨ ホン¹ト¹オト¹サント¹モ¹ネ¹ー]

(利用はしたよ。本当、お父さんともねえ) 宮崎市 1925年生 女性

⑦[モ¹ー コノヒトワタシ¹モ¹ サンジュー¹ネ¹ン¹ ソコニ ツ¹ト¹メテカイ¹ネ¹ー]

(もうこの人と私も30年・・・そこに勤めていたからね) 宮崎市 1938年生 女性

MY氏の内省によると、「歌がうまい」「牛が歩く」のような短文では[ウタ¹ガ¹ウマ¹イ][ウシ¹ガ¹アルク]か[ウタ¹ガ¹ウマイ][ウシ¹ガ¹アルク]の発音がもっとも自然であるとのことである。これらの例文は主格「ガ」を用いた行為者・行為構造(actor-action construction)の文であるが、「犬を殴る」のような対格「ヲ」を用いた目標・行為構造(goal-action construction)の文においても[イヌ¹ヲ¹ナグル][イヌ¹ヲ¹ナグル]が自然だと

いう。談話資料でも、格助詞、副助詞などで卓立することが多い。句末卓立は主語を含む名詞句末に出現しやすいが、述語には出現しにくい(終助詞が付かない場合)。このような卓立は、名詞句と動詞句の関係を強調しているものと考えられる。

名詞に修飾語が付いた場合は、[コノウタ「ガ」ウマイ](この歌がうまい)、[オーキノウシ「ガ」アルク](大きな牛が歩く)のような発音が自然であるという。「大きいのは牛である」ということを強調する場合は[オーキ「ナ」ウシ「ガ」アルク]のようになるという。この発音は「大きな」と「牛」の修飾関係を強調しているものと考えられる。つまり、句末卓立は、媒介部(徳田 1982)を強調することによって、句の関係を明示しているのではないかと考えられる。そこで、この宮崎のピッチパターンを北関東の句階層構造に対して、句関係明示構造と表現することにする。この MY 氏の句末卓立型の発話をピッチ曲線で表すと図2、図3のようになる。

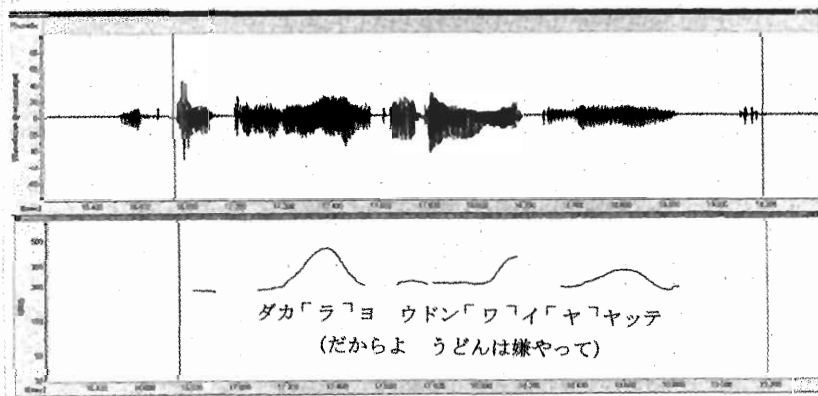


図2

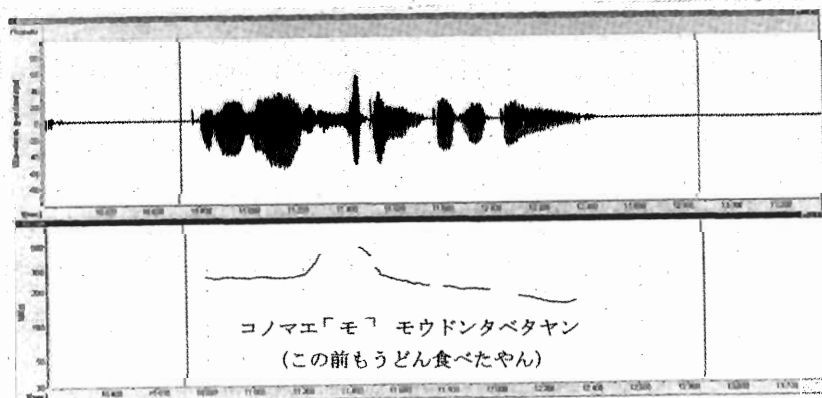


図3

上記の例は名詞句の最終拍が卓立しているが、助詞「ガ」や「ハ」の後に間投助詞が続く場合、間投助詞が卓立する例は少なく[ワタシ「ハ」ヨ](私よ)[コノワタシ「ガ」ヨ](この私がよ)のようになるという。この点も、単なる文節末の卓立といえない根拠となる。このパターンは、おそらく都城方言の尾高一型アクセントと呼ばれる現象に近いのではないかとと思われる。

句末に卓立がなく、平板調に発音されるパターンもある。これは読み上げ調査における②のパターンである。このパターンは北関東と近いもので、無アクセント共通の特徴と考えられる。ただし、句頭にほとんど上昇がない(もしくは非常に小さい)点において、北関東と異なる。図4は次の⑩のピッチ曲線である。

⑧[ネダンガタケ¹シエ エーカワンカ¹ッタ]

(値段が高いので、買うことができなかった)

宮崎市 1927 年生 男性

⑨[ココデトムカイナ¹ーッテパチンコヤマ¹エ イットココデシナルカー¹ッテ]

(ここで止めましょうかってパチンコ屋前。行くとここでしなさるかって) 宮崎市 1925 年生 女性

⑩[アンコワムゾラシコ¹ヨ¹ネ]

(あの子はかわいい子よね)

宮崎市 1927 年生 男性

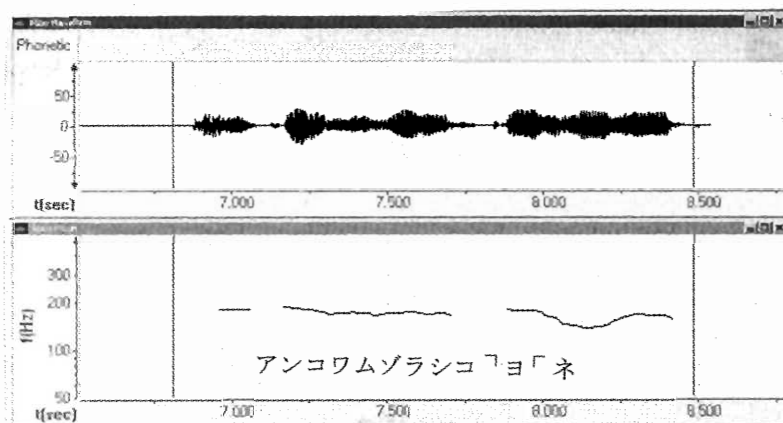


図4

句頭で卓立する場合がある。このパターンは句末卓立の場合と異なり、上昇の幅が狭いので、上昇よりも下降に意味があり、その句の意味を強調しているのではないと思われる。また、自然談話では⑬のように、句頭卓立と句末卓立が同時に出現するパターンも多い。句頭で卓立するピッチパターンは北関東でも観察できるが、宮崎のように連続することは少ない。

⑫[¹ワ¹カイオ¹カ¹ーサンニナッテ ¹コ¹ーユー¹コ¹トバガナクナッ¹デー]

(若いおかあさんになって、こうゆうことばが無くなって)

宮崎市 1938 年生 女性

⑬[¹カ¹ッテモラッタノ¹ガ¹センタッ¹キ¹ジャッタ]

(買ってきたのが、洗濯機じゃった)

宮崎市 1929 年生 女性

⑭[¹ノ¹サンコッチャ¹ノ¹サンコッチャチケンドゲンキ¹デ¹オ¹ラ¹ナー]

(つらいことだ、つらいことだって言うけれど、元気でいなくなあ) 宮崎市 1929 年生 女性

また、⑥⑦⑩⑭の例文からもわかるが、呼びかけの(相手に働きかける)終助詞「ネ」(同意)や「ナ」(確認)は卓立する傾向がある。卓立は、その位置によって意味が異なっていると考えられる。現在のところ、宮崎方言には次の三種類の卓立があると考えている。

- (1) 文構造に関わる句末の卓立
- (2) 句の意味を強調する句頭の卓立
- (3) 「呼びかけ」に関わる文末の卓立

北関東と比較した場合、(1)の現象(句関係明示機能)がもっとも大きな違いであり、特徴的な現象といえる。

5. おわりに

同じ無アクセントに分類されている北関東アクセントと宮崎アクセントであるが、そのピッチパターンの特徴には、いくつかの大きな違いがあることを述べた。北関東無アクセントの特色は、連続する平板調である。さらに、階層構造を成していると考えられるので、「平板階層型無アクセント」と表現することにする。それに対し宮崎無アクセントは、上昇が出現しない平板調と卓立の組み合わせが特徴的なので「平板卓立型無アクセント」と表現することにする。

宮崎アクセントを、弁別の特徴を持たないということで無アクセントと位置づけるのは正当であるが、既に述べたとおり、平山(1974)などで報告されている尾高一型アクセントと同種と考えられるピッチパターンも観察されている。木部(1996)では都城市で多人数調査を行った結果「今回の調査では助詞付きのアクセントは尾高一型で安定しているものの、単語単独の発音では尾高一型にはならない人が多かった。特に2音節名詞単独の発音は非常に不安定で、 $\overline{\text{〇〇}}$ 型が年齢を問わず現れる」(p.66)と述べている。これは、今回の宮崎調査でも観察できた事である。宮崎方言を無アクセント、都城方言を一型アクセントとするのであれば、その本質的な違いを明確にする必要がある。これは、今後の課題である。

今回、データを採録した宮崎市は宮崎県中部に位置する。九州中部の無アクセント域は広く、同じ無アクセントでも地域差がある可能性もある。この地域差を確認することも今後の課題である。

【注】

- 1) 有坂(1941)では統成機能、標差的機能と表現している。それぞれ統合機能、弁別機能に相当する。
- 2) この場合の句は、音調(ピッチ)を基準とするもので、文法機能による句と異なる。両者は表現においても区別する必要がある。ただし、本稿では、文法的な句は扱わないので、句といえば音調的な句を意味することとする。
- 3) 早野(1991b)では、東京語における句頭の上昇が語の連続を統合していることを、聴覚実験から証明している。
- 4) 「核」「式」などの弁別の特徴を有する語アクセントと、非弁別的な句音調とは当然のことながら、質的に異なる。
- 5) 句頭の上昇(川上 1961)やポーズ(杉藤 1989)などは、既に指摘されている通り、生理的ではあるが、意味のまとまりと関連した現象である。筆者は無アクセントのピッチパターンも発話における言語意識(特に意味のまとまり)が反映したものとして捉える。
- 6) 本稿では、音響分析ソフト Speech analyzer を使用した。
- 7) 若年層で獲得しつつあるアクセントは、地理的に近い京阪式アクセントではなく、やはり東京式ア

クセントであった(ただし、読み上げにおいて)。茨城の場合(早野 1991a)と同様に、獲得状況には個人差が大きかったが、これもパーソナリティによるの差(早野 1996)であると思われる。

- 8) この話者は小学校の教員で、型の弁別性を持たない典型的な無アクセント(宮崎アクセント)話者である。非常に反応がよく、さまざまな条件を理解して発話してくれたので、ここではその結果を利用する。
- 9) この卓立は、文節末で必ず観察できるものではなく、句を単位としているといえる。

【 参考文献 】

- 秋永一枝(1988)「日本語のアクセント」『日本語百科大事典』大修館書店
- 有坂秀世(1941)「アクセント型の本質について」『言語研究』7・8号
- 岩本実(1983)「宮崎の方言」『講座方言学第9巻 九州地方の方言』国書刊行会
- 岩本実(1991)「宮崎」『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書院(初版は1969)
- 上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院
- 川上泰(1963)「ピッチ・グラムで見た日本語のアクセント」『音声の研究』10
- 川上泰(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院
- 木部暢子(1996)『鹿児島市とその周辺地域における地域共通語の実態とその教育に関する研究』科研費報告書
- 金田一春彦(1956)「柴田君の「日本語のアクセント体系」を読んで」『国語学』26
- 柴田武(1955)「日本語のアクセント体系」『国語学』21
- 柴田武(1957)「アクセント論のために—金田一春彦氏に答える—」『国語学』29
- 柴田武(1961)「日本語のアクセント」『言語生活』113(徳川編(1975)『論集日本語研究2 アクセント』に再録。引用頁数は本書による。)
- 杉藤美代子(1989)「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院
- 徳田政信(1982)『新訂 日本文法論』風間書房
- 日本放送協会(1982)『カセットテープ 全国方言談話資料第二巻 関東甲信越編』日本放送協会
- 服部四郎(1954)「音韻から見た国語のアクセント」『国語研究』2(服部(1960)『言語学の方法』に再録。引用頁数は本書による。)
- 早野慎吾(1990)「芳賀郡方言のアクセント」『名古屋・方言研究会会報』7
- 早野慎吾(1991a)「無アクセント地域話者の共通語化」『東日本の音声—論文編—(1)』科研費報告書
- 早野慎吾(1991b)「文アクセントにおける「上昇」について」『Sophia University Working Papers in Phonic』1991)
- 早野慎吾(1992a)「アクセント」『地域言語と文化—玉造のことば—』玉造教育委員会
- 早野慎吾(1992b)「文アクセントについて—いわゆる無アクセントを理解するために—」『東日本の音声—論文編—(2)』科研費報告書
- 早野慎吾(1996)『地域語生態シリーズ関東篇 首都圏の言語生態』おうふう
- 早野慎吾(1999)「非弁別的アクセントの実態と系統」『Ars Linguistica』6
- 早野慎吾(2004)「発話素(utteranceme)としての文節」『Ars Linguistica』11
- 平山輝男(1968)『日本の方言』講談社新書
- 平山輝男(1974)「諸県方言の音調研究」『音声学世界論文集』日本音声学会